

中長期目標 (学校ビジョン)	学び、輝き、感動のある学校 幼児・児童・生徒が充実した学校生活を送り、個々の可能性を伸ばし、より良く生きることができるよう支援する学校 《 18歳で自立できる人を育てる 》 ～社会に繋ぎ時代を生き抜く力の育成～	今年度の 重点目標	○幼児・児童・生徒の能力・特性に応じた指導の充実を図る。 ○幼児・児童・生徒の可能性を伸ばし、社会参加していく力を育てる。
-------------------	--	--------------	--

年 度 当 初					評 価 結 果 ()月			
評価項目		評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策
一人一人に視点をあてた学習指導の充実	幼稚園部	●自立活動の指導において、個の課題を意識した目標設定が行われているか。	●学期ごとの評価等で個別の指導計画を見直す機会が少ないために、PDCAサイクルが循環していない。	●実態把握から浮かび上がった個の課題から目標設定を行う。	●自立活動チェックリスト等を活用しながら、幼児一人一人の課題を整理する。 ●研修等を通して、課題から目標設定までの流れを身につける			
	小学部	●課題となっている授業の学習指導が学習指導要領に則した目標や内容で行われているか。	●教育課程の改善に取り組んできている。それを授業として試行錯誤しながら実践しているところである。	●類型別学習グループで課題となっている授業の学習指導が改善する。	●類型別学習グループで授業づくりの研修を深める。 ●研究・研修課と連携して、学部研修の中で課題となっている 授業を取り上げて実践報告や検討会を行う。			
	中学部	●定期的なT T会や内外部機関のアドバイスを受けながら授業改善を進めたか。	●T T会等、授業の打ち合わせや評価をする時間を十分にとることができなかった。 ●生徒が学習しやすい環境づくりや姿勢についての支援、主体的に活動できる教材や補助具等、改善の余地がある。	●定期的な授業反省と校内研究との連携により授業改善が行われている。	●授業評価の工夫や定期的なT T会を実施する。 ●授業の問題点を明確にし、改善・実施したことに対して自立活動部・教科等指導部・外部専門家よりアドバイスを受ける。			
	高等部	●障がい特性を考慮した授業作りができたか ●専門教科に関する指導は充実したか。	●障がい特性に応じた指導をするために、担任、授業担当者間の連携ができつつある。 ●新規の専門教科設定に伴い、指導内容の検討や教材開発が必要である。	●個々の生徒について、各授業等の連携イメージができている。 ●専門教科の指導計画が整理され、地域資源を活かした授業を実施している。	●個々の生徒の指導チームによる指導に関する検討会実施と、授業作りのための授業公開実施。 ●3年間を見通した指導計画の検討。地域の企業等との連携を進める。			
18歳の自立を見据えた進路指導の充実	幼稚園部	●自立と社会参加する姿を意識しながら個別の教育支援計画を策定しているか。	●高等部を卒業した後の幼児・児童の生活するイメージが曖昧である。	●高等部を卒業した後の生活をイメージして、個別の教育支援計画に活かす。	●卒業後の生活をイメージすることの大切さを学部会等で話し合ったり、個別の教育支援計画の検討会での話題としたりする。 ●高等部の進路担当教諭にも参加を要請し、話し合いを深めるようにする。			
	小学部	●自立と社会参加する姿を意識しながら個別の教育支援計画を策定しているか。	●高等部を卒業した後の幼児・児童の生活するイメージが曖昧である。	●高等部を卒業した後の生活をイメージして、個別の教育支援計画に活かす。	●卒業後の生活をイメージすることの大切さを学部会等で話し合ったり、個別の教育支援計画の検討会での話題としたりする。 ●高等部の進路担当教諭にも参加を要請し、話し合いを深めるようにする。			
	中学部	●教育支援計画や進路指導計画を活用して、個に応じた指導を進めたか。	●中学部段階でどのような力を身につけているか良いのか不明瞭などところがある。 ●生徒の実態を考えながら指導を行っているが、進路指導旬間等で、もっと個に対応した指導が必要である。	●進路指導計画が実効性のあるものになっている。 ●進路指導旬間等で個に応じた指導が行われている。	●進路指導計画を練り上げ、その内容を日々の生活で取り組めるようにする。 ●個のねらいや身につけさせたい力を明確にし、進路指導旬間の指導に取り組むようにする。			
	高等部	●教育支援計画・移行支援計画は充実したか。	●教育支援計画作成の会を実施し、内容を検討しているが、十分とはいえない。 ●移行支援計画について書式、活用方法の見直し中である。	●支援計画活用のイメージを持って作成することができている。 ●移行支援計画活用の流れができています。	●支援会議や支援計画活用の事例をもとに学部研修を実施する。 ●移行支援計画の書式の整理、教育支援計画からの切り替え時期の変更。			
ニーズに対応できる専門性の向上	幼小小学部	●自分自身の専門的な知識や技能に気付き、それぞれが発揮しているか。	●求められる専門性を肢体不自由教育のそれだけと考えるところがあり、小学校教育、知的障がい教育や聾教育等の専門性を持つ者が力を発揮しきれていない。	●自分自身の専門性に気付く、それをそれぞれがグループ内や学部内に広める。	●それぞれが持つ専門性を他の者につなぐ役割の者を置く。 ●研修等で新たに身につけた専門性を全体に広げる機会を作る。			
	中学部	●実態把握のツールを利用しながら目標設定をおこなう。	●実態把握が担任の主観になることが多く、目標の妥当性を上げる必要がある。	●実態把握の段階から複数の教員で話し合い、目標を設定することができている。	●実態把握や目標設定、個に視点をあてた研修を学部で実施する。 ●諸検査を実施したり、自立活動チェックリスト等を活用したりする。 ●実態把握から目標設定まで、複数の教員で話し合える機会を設定する。			
	高等部	●アセスメントに関する知識・技術を活用できたか。	●個々の生徒の実態把握のために、検査やチェックリスト等があまり使われていない。	●検査等を実施し、客観的な実態把握ができるようになる。	●検査に関する学部研修を実施する。 ●個々の生徒に適した検査等を実施する。 ●個々の生徒について、アセスメント、授業作りのためのミニカンファレンスを実施する。			

評価基準 A：十分達成 [100%] B：概ね達成 [80%程度] C：変化の兆し [60%程度] D：まだ不十分 [40%以下] E：目標・方策の見直し [30%以下]